

< 研究ノート >

国民学校における「郷土の観察」の特色と意義

寺 本 潔*

1. はじめに

従来、国民学校時代の学校地理に関しては、その目的が国民の基礎的錬成にあった⁽¹⁾ことで、⁽²⁾超国家主義を背景に立つものだとする批判⁽³⁾が一般的であった。しかし、近年、中川浩一、安藤正紀、筆者⁽⁴⁾などが国民科地理の教育方法において、一部に近代的・合理的側面があるとする主張を行っている。⁽⁵⁾

特に、国民学校初等科第4学年に実施された「郷土の観察」においては、安藤が現在の社会科の地域学習の出発点であると位置づけ、その現代的意義を述べている。「郷土の観察」の教育現場での実践については、極めてその資料が乏しい状況にあり、安藤が資料発掘した後藤博美⁽⁶⁾の著作や雑誌「愛知教育」誌上⁽⁷⁾に載せられた指導体系案は、貴重な記録と言える。⁽⁸⁾

そこで、筆者も最近入手した広島高等師範学校附属国民学校国史・地理研究部編『全国における「郷土の観察」の実際』⁽⁹⁾（昭和17年発行）という文献から、大阪府女子師範学校附属国民学校の指導細目を紹介し、教育現場での「郷土の観察」の実践を多少なりとも明らかにしようと考えた。

以下、国民科地理と郷土の観察の特色を概観し、教育現場での実践も加えて、「郷土の観察」について若干の考察を試みたい。

2. 国民科地理と郷土の観察

(1) 国民科地理の性格

昭和16年3月14日に文部省令第4号として制定された「国民学校令施行規則」には、その第二節第六条に地理に関して次のように書かれている。

第六条 国民科地理ハ我が国土国勢及諸外国ノ情勢ニ付テ其ノ大要ヲ会得セシメ国土愛護ノ精神ヲ養ヒ東亜及世界ニ於ケル皇国ノ使命ヲ自覚セシムルモノトス

初等科ニ於テハ郷土ノ観察ヨリ始メ我が国土及東亜ヲ中心トスル地理ノ大要ヲ授ケ我が国土ヲ正シク認識セシムベシ

* 昭和56年度 教育研究科修了
愛知教育大学助手

高等科ニ於テハ世界地理及我が国勢ノ大要ヲ授クベシ

自然ト生活トノ關係ヲ具体的ニ考察センメ特ニ我が国民生活ノ特質ヲ明ナラシムベシ

郷土ノ觀察ハ、国史、理数科ト相俟テテ統一アル指導ヲ為スベシ

简单ナル見取図、模型ノ製作等適當ナル地理的作業ヲ課スベシ

地図、模型、図表、標本、写真、絵画、映画等ヲ利用シテ具体的直観的ニ習得セシムベシ

読図力ノ養成ニカメ遠足、旅行其ノ他適當ナル機会ニ之ガ実地指導ヲ為スベシ

上記の内容から、国民科地理の目的は、皇国民としての立場あるいは使命を明示した国家的な教育方針であることがうかがわれる。しかし、教授上の注意に関しては、具体的観察の重視、国史・理数科との関連、地図・模型・その他の視聴覚教材の利用、読図力の養成などを明記しており、近代的・合理的な側面をのぞかせている。

第1表 国民科・理数科に関する課程表(数字は、週当たり配當時数)

教科	科目	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
国民科	修身	国民道徳	10 同 じ	2 同 じ	2 同 じ	2 同 じ	2 同 じ
	国語	10 読方綴方 話方書方	11 同 じ	8 読方綴方 話方	8 同 じ	7 同 じ	7 同 じ
	国史				1 郷土の観 察	2 国史の大 要	2 同 じ
	地理					2 地理の大 要	2 同 じ
理数科	算数	算数一般	5 同 じ	5 同 じ	5 同 じ	5 同 じ	5 同 じ
	理科	5 自然の観 察	5 同 じ	1 同 じ	2 理科一般	2 同 じ	2 同 じ

(備考) 1時限の授業は40分。

(2) 国民科における「郷土の観察」の位置

「郷土の観察」は、課程表(第1表)によれば、初等科第4学年に週当たり1時間が配当されている。第4学年は、国民科国史・地理の導入部に当たり、「郷土の観察」を通して郷土の自然、産業、歴史などを国史・地理未分化の立場から、生活に即して観察させる上で、児童の心理発達と教材の発生的な組織を考慮した学年である。さらに、この学年は、第1学年～第3学年において教授される理数科の「自然の観察」⁽¹⁰⁾の後を受ける形ともなっている。即ち、郷土そのものを理解させることと第5学年より学習する国史・地理学習の素地を作ることを意図して設置されている。

3. 「郷土の観察」の特色

(1) 児童用書を編纂しない理由

「郷土の観察」の特色の一つとして、児童用教科書が発行されず、科目名と同じ『郷土の観察』⁽¹¹⁾教師用（文部省著作、昭和17年発行）のみが発行されたという事実がある。この点に関しては、教師用書の中に「児童用書を編さんしないこと」という一項を設けて、次のように解説している。

“郷土の観察は、上述の如く郷土の実地観察を主体とし、できる限り郷土の実際について直観的具体的に、かつまた作業的に指導すべきであり、『郷土の観察』教師用書は、この趣旨に基づいて編纂したものである。しかもこの趣旨を達成するには児童用書の必要を認めず、むしろこれを編纂使用させれば、結局「郷土の観察」を机上の教科書による指導に墮せしめる虞がある。教師用書のみを編纂した理由はここにある（傍点筆者）。”

この処置は、同様の理由で「自然の観察」にも適用されており、各教育現場での創意工夫にゆだねた点で今日においても高く評価されるものと思われる。⁽¹²⁾

(2) 教師用書の内容

『郷土の観察』教師用書の内容は、初めに総説があって、その中に郷土の観察の意義、地域的範囲、指導方針、教師用書編纂趣旨と取扱以上の注意の四項目を記し、その次に各説として九つの教材を挙げ、その趣旨と指導の要点が述べてある。

この教師用書の編纂に携わった佐藤保太郎は、郷土の教育的意義として、1. 郷土は児童の誕生地である、2. 郷土は祖先の土地である、3. 郷土は自然と人間の融合体である、4. 郷土は⁽¹³⁾皇国の一部である、5. 郷土は児童の生活環境である、の五つを挙げている。特に、5. にみられるように、必ずしも児童の生まれた場所でなくても、児童が体験によって得たものを基本とし、これを媒介として指導すれば、周辺にある事物と児童を結びつけることができると考えており、単に目的論的だけでなく、方法論的な郷土の捉え方を行っていたことが推察される。

教材の配列は、1. 展望、2. 学校、3. 山・川・海など、4. 気候、5. 産業、6. 交通、7. 村や町、8. 神社と寺院、9. 史蹟、となっており、項目別である。しかし、実際の指導に当っては、このような抽象的な題目を避け、具体的実際的な題目にすべきであると注意を述べている。⁽¹⁴⁾ また、これらの教材についての一つの特色として、「1. 展望」や3. 「山・川・海など」で景観観察を極めて重視し、写景図を描かせるように求めている点が挙げられる。方位の判定や距離の目測、遠近法の習得、地図と景観との対照、写景図の作成など、実に細かく指導の必要性を述べている。

ところで、このように写景を重視した理由は、いったい何であったのだろうか。この点について、次の推論が成り立つと思われる。

第一には、観察力を養わせるという目的から重視されたとする推論。第二には、当時隆盛であった景観地理学⁽¹⁵⁾を背景にした景観区の見方を取り入れたとする推論。第三には、写景図が軍の作戦上、地形やその他を簡単に表示するための図として使用されていた事実から、そのための描写力の修練を意図して重視されたとする推論である。いずれにせよ、写景図を描くには、その土地を正確に観察することが大切であるという点に限っては、有効な指導法であろう。

第2表 連絡科目及び教材の数

各 説	科目数	教材数	各 説	科目数	教材数
1. 展 望	2	2	6. 交 通	7	13
2. 学 校	3	5	7. 村 や 町	5	5
3. 山・川・海	10	15	8. 神社と寺院	14	21
4. 気 候	20	35	9. 史 蹟	6	8
5. 産 業	12	19	合 計	79	123

注) 「初等科図画」男子用・女子用など実質的に同一教材のものは、一つに数えた。

次に挙げられる大きな特色の一つには、他教科との関連が図られていることである。これは、国民学校の教育方針の一つ⁽¹⁶⁾でもあり、特に「郷土の観察」に限定したことはないが、第2表に示すように合計79科目、123教材との関連が考えられている。具体的に、「七・村や町」を例に述べてみる(第3表)。

「よみかた四」の「十四ゆうびん」の教材では、おそらく村や町の郵便局の役割を学習させたであろうし、「初等科算数二、三」の「私タチノ村」や「正一君の村」では、記述内容から判断すれば、村の人口や読図の学習にも関連していることがわかる。さらに、「初等科図画二」で描いた「私たちの郷土」の写景図の基礎を養う上で、密接な関連があり、「初等科工作一」の「10村」での村の模型づくりでは、初歩的な空間概念の育成を図ることに大いに関連があると思われる。

第3表 「七・村や町」の連絡教材

科 目	教 材	科 目	教 材
よみかた四	十四ゆうびん	初等科図画二	私たちの郷土
初等科算数二	私タチノ村	(男子・女子用)	
初等科算数三	正一君ノ村	初等科工作一	10 村

注) 文部省(1942):『郷土の観察』教師用書, 日本書籍, p.77より作成。

以上のように、様々な教科科目との関連を重視しながら指導していく「郷土の観察」は、郷土をコアにした総合的な授業形態がとれる可能性を有していた。

4. 「郷土の観察」の実践

これまで述べてきた「郷土の観察」の教育現場での実践について、大阪府女子師範学校附属国民学校の指導細目を検討することによって、その一端を明らかにしたい(資料1.)。

検討の結果、一部に修身との関連から、神社参拝や忠君愛国思想に関係した史蹟見学や国史学習がみられるものの、全体として「地名しらべ」や「方位さだめ」、「模型づくり」などの作業を多く取り入れたり、「生駒山とその附近」、「金剛山とその附近」、「町の商店」、「駅附近」などにみられるように、実地観察を中心に自然景観や人文景観に触れさせることを重視していることがわかった。特に、この指導細目の特徴としては、単に「郷土の観察」を実地観察だけに終わらせないで、前もって教室での学習によって観察すべき題材を決めさせ、それから実地に歩きながら観察し、調べたりし、最後に再び教室にて整理をさせるという流れを確立している点で、効果的な指導を心がけていたと思われる。また、指導細目の最後に載っているように、天気や動植物、屋上からの景観などの継続的観察を行わせ、児童の環境としての自然の季節的变化を捉えさせようとする配慮は、都市部にある学校の事情をよく考えた指導内容として注目できる。

資料1. 大阪府女子師範学校附属国民学校の「郷土の観察」指導細目

月	題目 時間	要 項	備 考
4 月	杭全神社 (1)	1.神社参拝にて皇国民たらん祈念。 2.境域内にあるものの名称を与え氏子の尊崇さを知らせる。 3.御祭神の神徳・御祭日、祭神と氏子との関係を知らせる。 4.帰途に大念仏寺に参拝する。	神社作法を教える。 神職に神話を御願いする用語(御祭神, 拝殿, 本殿, 神木, 本堂)を与える。
	地名しらべ (1)	1.周囲を見渡して知っているものを言わせる。 2.そして観察する態度を涵養する。 3.地上物について話合う。 4.郷土帖の使用法を教える。	1.尚田んぼ等の景色の変化に注意する様指示する。 2.屋上にて。 3.天気の継続的観察
	方位さだめ (1)	1.方位は既に学習しているものからそれを今一度復習する, そして或る方位に於ける著名なものを決定する(当校に於ては北に大念仏寺がある)。 2.作業は郷土帖に自由に見取図式に描かせる。	1.屋上にて。

5月	模型づくり (3)	<ol style="list-style-type: none"> 1.仕事の順序をはっきりさせる。 2.出来上がったものを塗色させる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1.古新聞紙を水に浸ける。 2.模型板八面を用意。 3.泥絵具を用意する。 4.教師が一面を製作する。 5.時間不足を予想する。 6.屋上にて。
	図を描く (2)	<ol style="list-style-type: none"> 1.個人作業をやらせる。 2.図化への注意を与える。 	<ol style="list-style-type: none"> 1.画板 2.画用紙 3.色鉛筆 4.郷土帖の表紙裏に袋をえて入れさせておく。 5.屋上にて。
6月	四天王寺と大阪城 (2)	<ol style="list-style-type: none"> 1.歴史に触れる。 海外の関係、古代の大阪 2.阿部野橋は南海平野線省線等の会合点として、遠足などを思い合わせて知らせる。 3.平野に紡績工場が多いことから、平野の昔に於ける綿作りと関係させる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1.郷土地歴地図 2.各自が描いた絵地図を用意させる。 3.教室にて
	生駒山とその附近 (1)	<ol style="list-style-type: none"> 1.生駒山の高さ、登った話し合い、飛行塔、寶山寺、ケーブル航空燈台グライダー等。 2.信貴山の歴史 3.航空路 	<ol style="list-style-type: none"> 1.生駒山、信貴山の写真 2.屋上と教室 3.用語を与える。
7月	金剛山とその附近 (1)	<ol style="list-style-type: none"> 1.金剛山の高さ 2.二上山火山群の存在 3.大和川は、生駒、金剛山脈の境としての峠の存在から軽く触れる程度。 	<ol style="list-style-type: none"> 1.郷土地歴地図 2.各種写真 3.楠公肖像 4.屋上と教室にて。 5.用語を与える。
	田んぼの景色 (1)	<ol style="list-style-type: none"> 1.如何なる栽培景が卓越しているか。 2.仕事する人々に対して尊敬することの念を涵養する。 3.自分たちの生活とこの栽培景との関係性を考えさせる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1.図(前に描いたもの)の補正をさせる。 7月の余った時間をあてる。 2.屋上にて。
9月	町のお話 (1)	<ol style="list-style-type: none"> 1.実地に観察する以前にその気分を作っておく。 2.各自に発表せしめて観察すべき題材を決定する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1.教室にて。
	町の商店 (2)	<ol style="list-style-type: none"> 1.どんな店が多いか。 どの通りに多いか。 2.家の作りにはどんな種類があるか。 3.お寺がどの辺に多いか。 	<ol style="list-style-type: none"> 1.見取図を作らせる。 2.実地に歩かせる。 3.農家にも注意させる。 4.用語を与える。

10 月	私 の 家 (1)	1.自分の家の町名番地は 2.地図に各自の家を記入させる。 3.家の構造, 家紋を郷土帖に書かせる。	1.郷土の白地図を用意する。 2.教室にて。
	駅 附 近 (2)	1.汽車の上り, 下りの名称。 2.街道(奈良街道)に於て人, 馬車, 自動車等の流れはどうか。 3.積荷や方向はどうか。 4.何故この場所に官署が集まっているか。	1.実地見学 2.簡単に交通量調査をさせる(分団にして) 3.用語を与える。
	市 場 (2)	1.どんな店が多いか。 2.買って行く人, 売っている人はどうか。 3.仕入先はどこか。 4.市場の場所, 交通との関係 5.露天市場はいつの日か。	1.実地見学 2.大念仏寺前の露天市場はいつであるかを注意させておく。 3.整理と話し合いに次の1時間を充当する。
11 月		1.感想を発展させる。 2.町の特色はどんなところにあるか。	1.教室にて。 2.用語を与える。
	紡績工場 (2)	1.どんなところに工場があるか。 2.自動機械を見学 3.働いている人々 4.原料はどこから来るか, 製品はどこへ送られるか。 5.他の工場はどの辺に多いか, 又どんな工場か(観察のみ)	1.大日本紡績株式会社平野工場を見学する。 2.行幸を仰ぎ奉った工場であること, 平野が綿作りの中心であること。 3.記帖は防諜関係からさせない。
12 月	大 和 川 (2)	1.川の様子を観察させる(上流, 中流, 下流, 右岸, 左岸, 樋等) 2.利用はどうか。 3.旧大和川と新大和川の流路について。	1.1時間… 観察 2.1時間… 教室学習 3.郷土地歴地図, 大和川の流路変遷図 4.用語を与える。
	地 図 (1)	1.地図はどんなものか。 2.地図はどのように読むか。 3.地図はどんなふうにするものか。	1.郷土附近の地図を与える。 2.自分が前に書いた地図と比較させる。
	朝 の 町 (1)	1.どちらへ行く人が多いか(市内へか, 平野へか)。 2.どんな人が多いか。 3.駅前の自転車屋の様子はどうか。	1.早朝神社参拝を利用して。
1 月	御 陵 (1)	1.御陵参拝をどこどこしたか。 2.御陵の名称は 3.どの辺に御陵が多いか。 4.御聖徳を偲び奉る。	1.遠足と連絡 2.郷土地歴地図を用意する。 3.御陵の御写真
		1.大阪城はどんなところにあるか, そし	1.郷土地歴地図

1 月	大阪城 (1)	てどんな形をしているか。 2.豊太閣と大阪城の関係は 3.市民と大阪城は	2.城の古図 3.城の写真 高津宮の写真
	大阪市 (1)	1.大阪市はどこからどこまでか、広さ。 2.どんな区があるか。 3.区役所・市役所はどこにあるか。 4.市長の名前 5.平野町は大阪市から見るとどんな場所にあるか。 6.仁徳天皇の御事蹟を偲び奉る。	1.大阪市地図 2.高津宮の写真 3.用語を与える。
2 月	大阪の町々 (2)	1.大阪市には高いところはないか。 2.河にはどんなのがあるか。 3.役所・学校・神社・寺はどこに多いか。 4.賑やかなところはどこか。 5.工場の多いのはどこか。 6.何をこしらえているか。	1.大阪市地図
	乗り物しらべ (1)	1.どんな交通機関の種類があるか。 2.主なものの名称は 3.それらはどこへ行くか。 4.沿線の名高いところはどこどこか。	1.郷土地歴地図 2.乗り物だけを書いた地図 3.用語を与える。
3 月	大阪府 (1)	1.大阪府の広さは 2.どんな郡や市があるか。 3.大阪府の自然、山は、河は 4.大阪府ではどんなものが出来るか。 5.府庁はどこにあるか、知事さんの名は。	1.大阪府地図
	屋上から (1)	1.めぐり来る春の景色を見させる。そして変化は 2.各自の図を補正させる。	1.屋上にて。
継	観 察 表	1.天気は、晴、曇、雨か。 気温は、風の方向は 2.動植物は 庭の木々、田んぼの景色の変りを、又どんな動物類があらわれ又姿を消したか。 3.山の姿が見えるか見えないか等。	日番制にて午前10時観察して記入。 地名しらべと連絡して。
続	各自に図を作成させる	1.自宅附近の略地図 2.学校までの行程地図	私の家と連絡して始める。
<p>注) 広島高等師範学校附属国民学校国史・地理研究部(1942):『全国における「郷土の観察」の実際』目黒書店, pp.102~108より一部要約して作成。</p>			

5. おわりに

以上、国民学校時代の学校地理として「郷土の観察」を取り上げ、その主な特色を述べ、教育現場での実践例として、大阪府女子師範学校附属国民学校の指導細目を紹介した。

そこで、結論として「郷土の観察」が持つ今日的な意義を明示しておきたい。

① 国民科「郷土の観察」は、その教育目的においては、極めて国家主義的であり、批判され得る科目であるが、その教育方法においては、児童の生活環境の実地観察、作業学習などを大胆に導入し、具体的な指導内容を現場教師の創意工夫にまかせた点で近代的・合理的な側面を有しており、改めて見直す必要がある。

② 特に、いわば教師の足で教材研究をすべき現在の小学校社会科中学年の地域学習において、ともすれば既製の副読本に頼りがちな傾向に、教師自身の創意工夫の大切さを改めて感じさせる。

③ 他教科科目との関連も重視され、児童の生活する環境をさまざまな角度から学ばせようとしていたことがわかる。また、景観観察や写景図の作成を課し、統一的な環境の認識を図ろうとしていた点が認められる。

これらは、教師や児童自らが「郷土を理解し、郷土で学ぶ」ことの大切さを示している。

<注および文献>

- (1) 国民学校は「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ以テ目的トス」とある。 宮原ほか編(1974)：『資料 日本現代教育史4』三省堂，p.325
- (2) 山本幸雄(1958)：『地理教育史』大修館書店，p.78。
木本 力(1969)：「地理教育からみた戦争責任」歴史地理教育158，pp.37～41
- (3) 中川浩一(1975)：「日本の地理教育の歩みと動向」矢嶋・位野木・山鹿編：『現代地理教育講座第Ⅱ巻 地理教育の動向と課題』古今書院，pp.153～156。
- (4) 安藤正紀(1979)：「国民学校時代の学校地理(1) — 『郷土の観察』を中心に、現代的意義を考える —」，地理学報告49，pp.21～30。
- (5) 拙稿(1981)：「国民科地理に関する一考察 — 初等科地理(上)・(下)を中心として —」，新地理29-2，pp.25～35。
- (6) 「郷土の観察」に関する詳細な指導計画や指導案などを掲載した文献は、筆者の知る限りでは以下のものぐらいである。

雑誌「地理教育」誌上に結城豊太郎(1941)：「国民科郷土の観察指導細目」，地理教育33-6。

雑誌「地理学研究会」誌上に宮本儀 (1944)：「『郷土の観察』実施の二、三」，地理学研究3-2などがある。また、単行本としては、石崎 庸(1943)：『郷土の観察とその実践』帝国

出版協会・や長野師範付属国民学校教科研究会(1944):『郷土の観察指導の実際』などがある。これらの資料に関する検討は、別稿において行う予定である。

- (7) 愛知県第二師範学校附属小学校訓導である。
- (8) 愛知県教育会発行の雑誌で、安藤はこれに掲載されている愛知県第一師範学校附属国民学校の実施案を紹介している。
- (9) 広島高等師範学校附属国民学校国史・地理研究部編(1942):『全国における「郷土の観察」』目黒書店, 283 ページ。
本書には、全国21の師範学校附属国民学校の指導細目が掲載されているが、そのうち、比較的地理的な内容が多い例として大阪府女子師範学校附属国民学校の指導細目を選んだ。今後、師範学校附属国民学校だけでなく、一般の国民学校における実践が、どの程度、「郷土の観察」の趣旨を反映していたか、という点の検討が残されている。
- (10) 「自然の観察」は第1期(初等科 第1・2学年)では、算数と未分化的な度合いが強く、第2期(初等科 第3学年)は、独立して1時間の毎週授業時数が配当されている。
- (11) 文部省(1942):『郷土の観察 教師用』日本書籍, 133 ページ。
- (12) 朝倉隆太郎も同様に、当時の文部省の識見を高く評価している。
朝倉隆太郎(1982):「小学校の地域学習と教材研究のあり方」, 社会科教室250, pp. 2~6。
- (13) 佐藤保太郎(1943):「国民学校に於ける『郷土の観察』の指導理念」地理学研究2-6, pp. 52~58。
- (14) 佐藤保太郎(1942):「四年『郷土の観察』の取扱い方」日本放送協会編:『文部省 国民学校三, 四年教科書編纂趣旨と取扱い方』日本放送出版協会, pp. 114~122。
- (15) わが国における景観地理学は、山口貞雄によれば、辻村太郎が1930年地理学評論に「文化景観の形態学」を発表したのに始まるとされる。山口貞雄(1943):『日本を中心とせる輓近地理学発達史』済美堂, pp. 140~146。
- (16) 国民学校令施行規則第一章第一節第一条の五。に「各教科並ニ科目ハ其ノ特色ヲ發揮セシムルト共ニ相互ノ関連ヲ緊密ナラシメ之ヲ国民鍊成ノ一途ニ帰セシムベシ」とある。文部省(1972):『学制百年史(資料編)』帝国地方行政学会, p.116。

<付記>

本研究は、1983年2月筑波大学社会科教育学会第2回大会において口頭発表した。本稿作成に当たり、資料収集に多大の援助を賜った茨城大学教授中川浩一先生に感謝申し上げます。